

NPO法人健康医療開発機構 第7回シンポジウム

平成26年3月2日(日)
学士会館210号室

第2部 パネルディスカッション

「未来志向の漢方－奈良県の取り組み－」

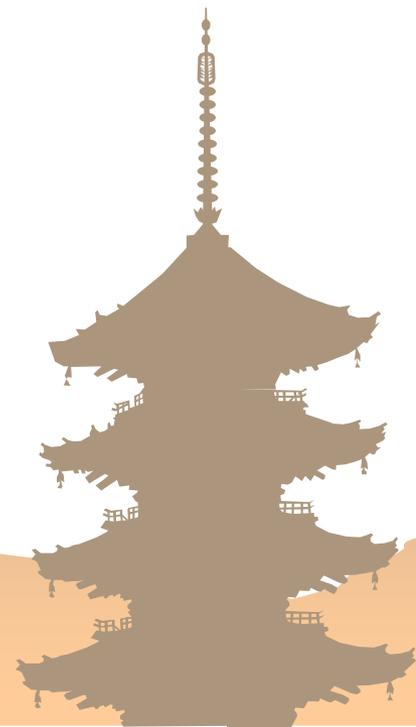
公立大学法人奈良県立医科大学

理事長・学長 吉岡 章



目次

1. 奈良と薬の古い関係
 - ◆歴史 ◆人物 ◆史跡
2. 優良な大和の生薬
 - トウキ、シャクヤク、ジオウ
3. 漢方のメッカ推進プロジェクト
 - ◆概要
 - ◆取組内容



1. 奈良と薬の古い関係

歴史(1) 推古天皇の薬猟

くすりがり 推古天皇の薬猟

日本書紀には、推古天皇が現在の宇陀地方で薬猟をされたという記述(611年)があります。

～日本書紀～

卷第二十二、推古天皇十九年(611)

「夏五月の五日に、菟田野(うだのの)に薬(くすり)猟(がり)す。鷄明時(あかつき)を取りて、藤原池の上(ほとり)に集ふ。会明(あけぼの)を以(も)て乃(すなは)ち往(ゆ)く。」

●宇陀市



推古天皇薬猟壁画(星薬科大学所蔵)

1. 奈良と薬の古い関係

歴史(2)東大寺正倉院

東大寺正倉院の「種々薬帳」

東大寺正倉院の御物の中には、21の漆櫃に納められた60種の薬があります。

これらは奈良時代(756)の聖武天皇崩御七七忌に孝謙天皇・光明皇后が東大寺盧舎那仏(いわゆる奈良の大仏)に献じ、同年建立の正倉院が保管したものです。それらを献上した際の献物帳も正倉院に現存し、巻首に「盧舎那仏に奉る種々薬」とあることから、一般に『種々薬帳』と呼ばれています。



東大寺正倉院正倉
(宮内庁正倉院事務所より提供)



奉盧舎那仏種々薬帳
(宮内庁正倉院事務所より提供)

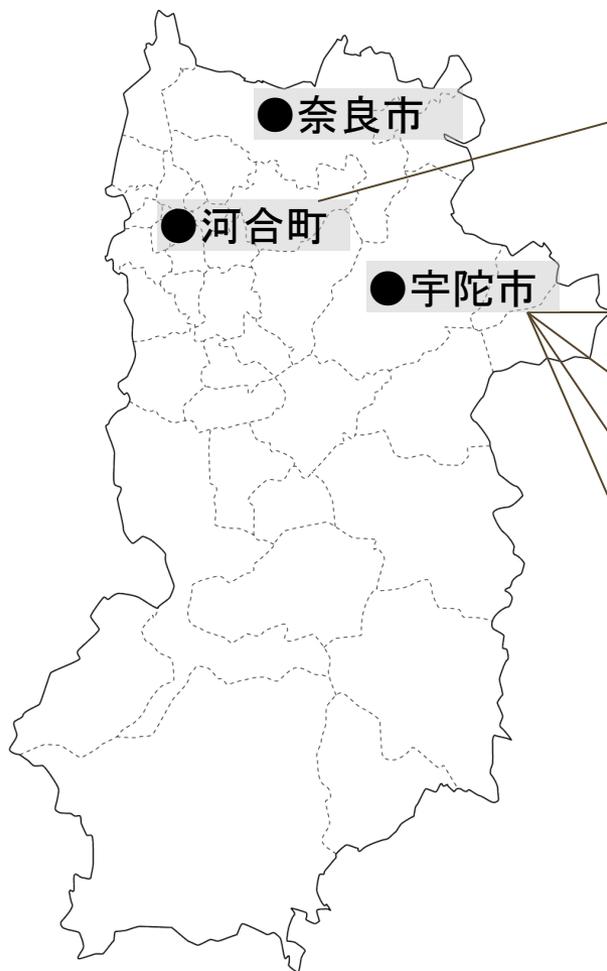


正倉院の漆櫃と生薬

1. 奈良と薬の古い関係

人物(奈良県出身の薬業創業者)

奈良県出身の薬業創業者



武田(近江屋)長兵衛(河合町出身)
1781年「近江屋(現**武田薬品工業(株)**)」を創業

津村重舎(宇陀市出身)
1896年「中将湯本舗津村順天堂
(現**株ツムラ**)」を創業

山田安民(津村重舎の実兄)(宇陀市出身)
1899年「信天堂山田安民薬房
(現**ロート製薬(株)**)」を創業

笹岡省三(宇陀市出身)
1903年「命の母本舗笹岡省三薬房
(現**笹岡薬品(株)**)」を創業

藤澤友吉(宇陀市出身)
1894年「藤澤商店(のちの藤沢薬品、
(現**アステラス製薬(株)**)」を創業

1. 奈良と薬の古い関係

史跡(1) 森野旧薬園

森野旧薬園(奈良県宇陀市) ～小石川植物園と並ぶ、日本最古の薬草園



将軍徳川吉宗の時代には、幕府の採薬使である植村佐平次政勝による薬草採取旅行が行われ、大和では、これに森野藤助らが同行。その後幕府から、薬草6種を拝領し、自ら採取した薬草とともに、(現在の宇陀市にある)自宅の背後にある台地の畑に栽培し、森野旧薬園を始めました。



カタクリ(3～4月頃)



森野旧薬園の薬草園



史跡森野旧薬園(写真は森野旧薬園HPより引用)

1. 奈良と薬の古い関係

史跡(2)大神神社

おおみわ

大神神社(奈良県桜井市)

奈良県桜井市にある大神神社は、日本最古の神社と呼ばれているもののひとつです。

大神神社から狭井神社までの「くすり道」の両脇には薬草や薬木が植えられています。

4月18日は、大神神社の鎮花祭の日です。毎年、桜の花びらが舞い散る頃、花びらとともに疫病が流行すると信じられ、花を鎮めて災難・疫病を鎮め、無病息災を祈願しています。「薬まつり」とも呼ばれています。



大神神社



くすり道



狭井神社の薬井戸

2. 優良な大和の生薬

生薬栽培の伝統

◆生薬栽培の伝統

地理的にも恵まれた奈良県は、種々の生薬の栽培に適した環境にありました。

江戸時代に入ると漢方の需要は高まり、特に8代将軍吉宗の時代には諸国に薬草栽培を奨励しました。

そのような状況において、古くから薬草栽培が行われてきた大和地方(奈良県)は重要な一地域となりました。そして、より日本人の体質にあった、優良な生薬の種苗が育てられ、栽培されました。



大和トウキ(花)



シャクヤク(花)



アカヤジオウ(花)

2. 優良な大和の生薬

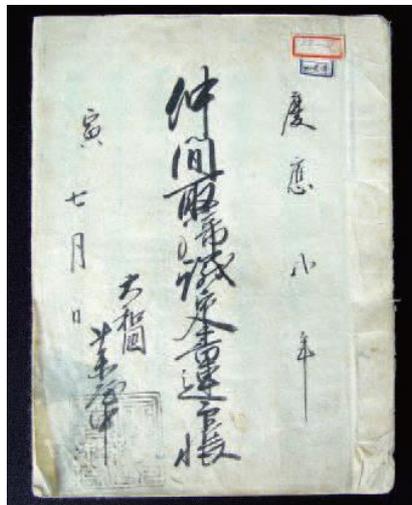
大和の売薬

江戸時代中期に大和の名薬として、米田の三光丸、藤井の陀羅尼助、中嶋の蘇命散が著名となりました。

大和の配置売薬は、民間の力で広げていった経緯がありますが、幕末の頃にはほぼ全国に行商圏を広げています。



くすり入れ
(エーザイ(株)の内藤記念くすり博物館所蔵)



仲間取締役議定書連印帳
(三光丸クスリ資料館提供)

これに伴い、富山売薬と競合することになりました。紛争を避けるため、1866年に大和、富山、加賀との間で協定が結ばれました。その内容は「仲間取締役議定書連印帳」に記されています。

3. 漢方のメッカ推進プロジェクト

奈良県にゆかりの深い“漢方”について、生薬の供給拡大から関連する商品・サービスの創出等に向けて総合的な検討を行うため、プロジェクトを立ち上げました。

※「漢方のメッカ推進プロジェクトチーム」(平成24年12月設置)

- ・アドバイザー： 渡辺賢治 慶應義塾大学教授(県漢方推進顧問 県立医科大学客員教授)
- ・関係部局： 医療政策部、産業・雇用振興部、農林部、南部東部振興監、観光局、奈良医大

(参考)奈良県の進める6つのプロジェクト



3. 漢方のメッカ推進プロジェクト

取組の構成

薬用作物生産に関わる
人材確保

生薬製剤、漢方薬の
製造・販売促進

生薬生産



生薬製剤



漢方の臨床



セミナー開催



ステージ1
生薬の供給拡大

ステージ2
漢方薬等の製造

ステージ3
漢方薬等の研究・臨床

ステージ4
漢方の普及



薬用作物



漢方派生品
(化粧品等)



漢方の研究



普及・啓発

産業につながる
薬用作物研究の高度化

漢方薬の認知度向上

生産から販売までの
一貫体制の構築

3. 漢方のメッカ推進プロジェクト 平成25年度の主な取組内容

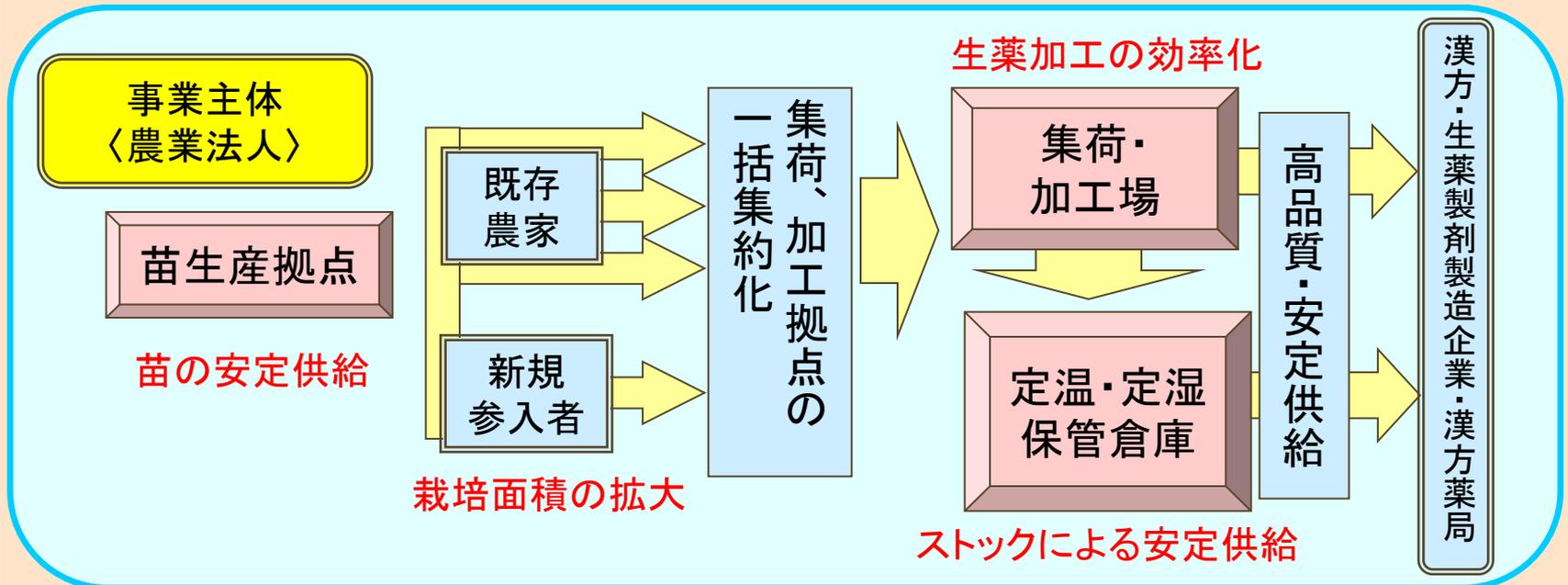
6次産業化モデル事業

今後の生薬栽培における6次産業化モデルケースの検証

総務省 地域経済循環創造事業交付金に採択（H25.6.7採択 50,000千円）
農業法人が、種苗の確保、栽培、集荷・加工、保存、販売までを担うための拠点を整備

効果

- ・順次規模拡大（販売先の開拓）→農業者増、栽培面積の拡大
- ・安定した種苗確保 →将来的には種苗ビジネスへ



3. 漢方のメッカ推進プロジェクト 平成25年度の主な取組内容

ステージ3 漢方薬等の臨床・研究

公立大学法人 奈良県立医科大学での取り組み

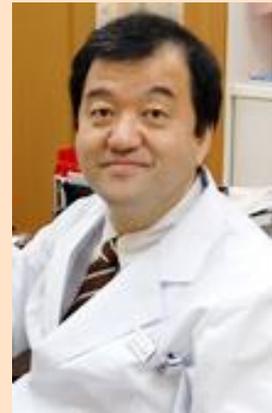
- 県立医科大学における教育外来(H25. 5～)
渡辺特任教授が医大の外来患者に対し、漢方処方を行い、複数の医師と症例検証を行う。
- 奈良県立医科大学中期目標(H25～H30)より
漢方の研究、人材育成、地域医療者への研修普及に向けた**大和漢方医学薬学センター**を設置(平成26年3月1日付)。
- 医大の医師、県内開業医を対象に、漢方の診療法、症例検討を行うセミナーの開催
- 医科大学学生に対する漢方医学の講義を充実強化



漢方の教育施設に認定された
奈良県立医科大学附属病院



奈良県立医科大学
特任教授 渡辺 賢治氏



奈良県立医科大学
特任教授 三谷 和男氏

3. 漢方のメッカ推進プロジェクト

平成25年度の主な取組内容

ステージ4 漢方の普及

漢方薬剤師の育成

○薬剤師等向けの漢方研修会

- ・H25.8.22(木)110名参加、H25.10.19(土)130名参加
- ・今後、12月7日、2月22日の2回を予定。
- ・講師 近畿大学東洋医学研究所 准教授 森山健三氏



漢方の啓発

○漢方薬シンポジウム2013の開催

- ・日時 H25.11.9(土)
- ・場所 奈良県文化会館国際ホール
- ・内容 テーマ「体を温める大和当帰(トウキ)」
～ 奈良は良質な大和当帰の一大産地 ～

基調講演

日本東洋医学会 名誉会員・名誉教授 鹿野美弘氏

慶應義塾大学教授(奈良県立医科大学客員教授) 渡辺賢治氏

パネルディスカッション

- ・参加者 680名





再び奈良を 漢方のメッカに！

「奈良ブランド」として揺るがぬ品質を誇る当帰が薬。これらの生薬を核に、奈良県で優良な生薬をもつ栽培し、漢方医学の研究や診療などのメッカとして育てていこうというプロジェクトが進行中だ。この「漢方のメッカ推進プロジェクト」をリードする奈良県は「病気に寄り添い、生活の質の向上へと導く漢方には大きな期待を寄せている。地域の産業として力を入れ、興していきなさい」と前田努副知事と強い意気込みで推進。一方「大和漢方医学薬学センター」の開設を目指す県立医大も「奈良こそ漢方発祥の地。漢方に目覚め、今まさに漢方に立ち戻る（吉岡章学長）」と県と手を携え、漢方医療の拠点づくりに向けて体制づくりが余念がない。「漢方の故郷奈良」で開かれた市民参加の討議会で、和漢薬の将来性を考え合った。

「漢方薬シンポジウム2013」
(2013年11月9日奈良市内で開催より)



渡辺賢治氏
慶應義塾大学教授
奈良県立医科大学客員教授



鹿野美弘氏
日本東洋医学会名誉会員 名誉教授
世界中医薬学会連合会高級専門家顧問委員

漢方の世界では既に2000年前に薬同士の組み合わせがどんな作用をするかが書かれていた。当帰を主に処方した「当帰芍薬散」は女性の妙薬で貧血、冷え症、妊娠の継続などに臨床的に有用で、効果が現れるのも早い。「十全大補湯」はがん治療に不可欠で、抗がん剤や放射線療法の副作用の軽減、患者さんの生活の質の向上などに使われるほか、ひどい疲労の改善などに使う。品質のよい大和当帰はブランド品。生産量を増やし、質を守り、発展させてほしい。

中国の当帰の近縁植物を大和地方で見つけ、栽培に成功して名付けたのが奈良県の大和当帰。さらに、調整加工技術が進歩し、大和当帰の中でも最高級となったのが（五條市大深町あたりで栽培された）大深当帰で、県内産は長年の使用経験から日本人の体質に最も合っているといえる。身体を温め、活力をつけるのが当帰。この薬を薬膳や適切な利用法で、健康維持増進の食品としてもっと使っていただきたい。



Point 2

当帰「楽チン」生産術

和田
4年ほど前から当帰の栽培復興に取り組んでいますが、苗作りに1年、定植から収穫まで1年。2年がかりの気が遠くなる生産スタイルです。

小西
逆に2年間というゆったりとした速度で作れるのは、障害者や高齢者には取っ付きやすいとも言えますね。

渡辺
高齢者でも作れますか？

和田
うちではほとんど60歳以上。栽培サイクルが今、24ヶ月から17ヶ月に短縮されていますから、この技術の定着に期待しています。

鹿野
高齢者でも誰でも楽に栽培管理の作業が出来る方法が開発されるといい。

Point 1

安全性で優位な国産生薬

渡辺
中国からの安いものにどう対抗し、価格競争をするのか。安心安全であるかどうか。その点ではトレーサビリティのしっかりした国産生薬の復興は欠かせません。

藤本
確かに国産は安心度が高いですが、価格が高くて、買って、飲んでもらえるようにできるかどうかですね。

嶋田
奈良で伝統的に栽培している当帰と、中国で日本の種で栽培したものとは味が違う。奈良の当帰の方が味がずつといい。中国本来の当帰は日本のものとは基原が異なり、日本では医薬品として使えません。価格差が埋まれば、奈良に（産地が）戻ってくると思います。



嶋田康男氏
日本生薬連合会技術参与



和田宗隆氏
(株)バンドラファームグループ
代表取締役社長



小西英玄氏
社会福祉法人奈良県手をつなぐ育成会理事長、
元奈良市薬剤師会長



藤本真一氏
コーディネーター
奈良県立医科大学教育開発
センター教授

Point 3

品種改良で薬効を凝縮

藤本
生薬生産の8割以上は中国産。日本で生薬の生産を増やそうと国も取り組んでいます。当帰でいえば花が咲くと（薬になる）根が生長せず使えなくなるので、花が咲きにくいように品種改良するのも有効では？

嶋田
花が咲きにくい当帰ができたら、その種は奈良から出さず、保護していく。奈良産がいいとわかれば、消費者も理解して使っていたらと思います。

Point 4

「漢方ミュージアム@奈良」・「奈良薬膳特区」構想

藤本
大和ブランドの当帰、芍薬などを使って県の活性化を目指す「漢方のメッカ推進プロジェクト」が進められています。

小西
例えば漢方の良さを体感できるような「漢方ミュージアム」構想を実現させては？そこには生薬の花壇、漢方風呂やレストラン、診療システムなどを設ける。休耕田を活用して「当帰の里」を創造するのいい。漢方発祥の地・奈良だからこそできる地域産業の活性化を仕掛けていきませんか？

和田
「食」の観点から漢方を広めるのが一番普及するのは、ぜひ奈良県で「薬膳特区」を推進していただきたい。法律を整備し、食から漢方が広がっていくような働きかけができればいいですね。

薬効の研究

薬効の研究から優良品種の育成、新たな商品化へ



大和トウキ

農業総合センターにおける研究の高度化

- ①優良品種の育成
 - ・ゲノム解析によるDNAマーカーの作成
 - ・DNAマーカーを活用した品種改良
- ②農作業の省力化と低コスト化
 - ・生産規模の拡大を可能にする収穫機、調整機の開発

生薬の薬効研究

高い薬効が期待できる品種の育成を研究

有用性(有効性と安全性)を検証し、商品に付加価値

漢方関連製品の新たな商品化

- ・既存商品の原料を県内産に置換え
- ・生薬原料の需要喚起のための新たな商品化への技術支援

<一般用漢方製剤>

漢方の医学体系に基づく処方からなる薬剤

例) 中高年を対象としたラインナップなど



<生薬製剤>

漢方に基づかず、個々の生薬の効能から処方構成する薬剤

例) 婦人薬、民間薬など



<漢方派生品>

生薬を配合した化粧品、食品及び生活用品など

例) 化粧品、薬膳料理パンなど





奈良県立医科大学 大和漢方医学薬学センター キックオフセミナー

奈良県立医科大学では、漢方医学薬学に関する教育・研究・診療活動の充実並びに県民の健康増進及び地域の活性化を推進するため、「大和漢方医学薬学センター」を新たに設置いたしました。

この設置を記念して、下記のとおりキックオフセミナーを開催いたします。

◆日時◆

2014年3月7日(金) 16:30~18:00 (セミナー)
18:00~19:00 (交流会)

◆会場◆ 【受付 16:00~】

奈良県立医科大学 厳橿会館 3F 大ホール (橿原市四条町 840 番地)

◆プログラム◆

1. 開会挨拶 [16:30-16:50]
吉岡 章 (理事長・学長 大和漢方医学薬学センター長)
2. 来賓ご挨拶 [16:50-16:55]
橋本 安弘 (奈良県知事公室審議官 (漢方のメッカ推進プロジェクト担当))
3. 記念講演 [16:55-17:55]
「なぜ今漢方か?なぜ大和か?」
渡辺 賢治
(大和漢方医学薬学センター特任教授・副センター長、慶応義塾大学教授)

：：：：休憩：：：：

4. 交流会 [18:00-19:00] (会費制)

参加費無料

[要事前申込]

定員 80名

(交流会 1,000円)